

柿生郷土史料館 第67回カルチャー・セミナー

国史跡・奈良時代の役所と寺院

平成29年4月15日 午後1時30分より

講師 村田文夫(かわさき市民アカデミー副学長)

1. 本題にはいる前に整理しましょう

よく受ける質問

(1) 官衙と郡衙 どこが違うのですか？

官衙→国衙(国庁)とか郡衙など、古代の役所施設全般を意味しています

郡衙→上記のなかから、郡衙(文献学上では郡家・ぐうけ)を特定して指しています

(2) 影向寺と影向寺遺跡 どこが違うのですか？

影向寺→考古学的には、古代、境内に建てられた寺院とそれ以前・以降の関係資料全般を指して呼んでいます。そして、古代からの法灯は現在につながっています

影向寺遺跡→『新編武蔵風土記稿』によると近世・万治年間(1658~61)に薬師堂が炎上し、その時、木造の薬師様が影向石(塔の心礎石上)に「影向」(神仏が突然現れる)したので、これ以降、影向寺と称したとあります。そうすると、「影向寺遺跡」としたら、近世以降の考古資料に限定するという解釈が生じます。しかし、境内からは古代のみならず、それ以前の弥生時代の資料も多く発掘されている。その意味からも、学界にも広く膾炙されている「影向寺」の方がはるかに相応しいでしょう。

(3) 従来の「千年伊勢山台遺跡」と「橘樹郡衙跡」 どこがちがうのですか？

遺跡名は、現在は原則として、所在地の大字+小字を基本としています。「千年伊勢山台遺跡」はこの原則に則っています。一方、「橘樹郡衙跡」は、遺跡の性格に則っています。仮に将来、「橘樹郡衙跡」の範囲から、「影向寺」関係の資料が発見されたら、遺跡名と明らかに齟齬をきたすこととなります。現に「橘樹郡衙跡」の範囲からは、これまでも弥生時代の資料などがたくさん発掘されています。

個人的な見解としては、「橘樹郡衙跡」は従来どおり「千年伊勢山台遺跡」、「影向寺遺跡」も従来どおり「影向寺」と呼称するのが適切と考えています。そして、「千年伊勢山台遺跡」と「影向寺」を含めて「橘樹官衙遺跡群」と呼称するのが、もっとも妥当と考えています。

* 古代の寺院は、郡の鎮護を願って建て、信仰したものであるから、官衙遺跡の範疇で理解しても異論はないでしょう。考古学では、「郡寺」とも通称しています。その意味では、神社も同様であります。

影向寺、千年伊勢山台遺跡の調査・研究の歩みを回顧する

I・影向寺関連を回顧する

(調査・研究に先鞭をつけた人たち)

大正期→大場盤雄先生と三輪善之助先生 「都」銘の瓦 影向石の意味
昭和期→30年～40年代 古江亮仁先生 武蔵国分寺と同時期の創建と推測

影向寺の創建期は、郡名「橋樹寺」ではなかったか？

橋樹郡衙の位置や小高駅家位置にも言及していた。

昭和50年→「影向寺は掘らなくてよいのか」。上司の一声が本格的なスタートであった。

【発掘調査上の画期】

A・昭和52年～56年 影向寺文化財総合調査(県費補助で川崎市が実施)

- ①「影向石」は、三重塔の心礎石であることを確認。
 - ②発掘された瓦の研究から、寺の創建は、7世紀後半代であることを確認(武蔵国分寺より半世紀も古い地方寺院)。しかし、肝心要の金堂跡は確認できなかった(薬師堂下が最後に残された有力説となった)。
- *この時の調査で、「无射志国荏原評」と刻書した文字瓦が発掘されていた。しかし、この事実が公表されたのは、平成12年であった。

B・昭和61年～63年 県重文の影向寺薬師堂の半解体工事にともなう堂下部分の発掘

- ①薬師堂が近世・万治年間(1658～61)に炎上していたのか
炎上しておらず、焼失したのは絵図にある庫裏であった。
- ②堂下に古代金堂跡の痕跡が見つからないかどうか
結果は、見事に的中、「見つかったぞ!」の喝采であった

【現時点での総括】

- ①・寺院の創建は、瓦類の分析から7世紀(第4四半期)にまで遡る。
- ②・豪族の「捨宅寺院」的な性格から発生して、次第に本格的な整備となり、8世紀中頃(武蔵国分寺が建てられた頃)前後には、三重塔が建つ本格的な「郡寺」になった。
- ③・平安時代になると、列島規模の大地震が頻発。弘仁9年(818・M7.9、関東大地震と同じ)と、元慶2年(878・M7.4)に関東平野を襲った大地震で、間違いなく影向寺の建物も甚大な被害を受けている。しかし、おそらく三重塔は倒壊していないと思う。
- ④・その後も盛衰があり、堂塔の毀損などがあったが、15世紀になり、深大寺(調布市)の学僧・長弁からの支援(栄興寺伽藍再興勸進状)を得て、宗教活動はふたたび活況を呈するようになり、現在に至っている。
- ⑤・現在の薬師堂は、典型的な密教本堂で元禄7年(1694)に、地元の大工・に木島長右衛門によって完成した(県の重要文化財)。

II・千年伊勢山台遺跡関連を回顧する

子母口富士見台から郡衙の一角が発見された!?

昭和62年、郡衙の正倉建物が、子母口富士見台から発見された。だが、橘樹郡衙ではない?

これぞ、橘樹郡衙の正倉院跡であろう(平成8年6月)

影向寺の東方、約250m離れた千年伊勢山台から郡衙の正倉が規則的な配列で発見された。

古代の統治機構、祭政一致の姿が捉えられた。(祭祀を司る寺院、政治を司る役所)

以後、郡衙関係の遺構の範囲を確認するため、平成10年～16年まで継続的に発掘調査。

意外な調査成果であった

- ①・郡衙は、正倉・郡庁・館・厨ほかで構成されているが、千年伊勢山台から発掘された遺構は「正倉」跡だけのようである。いわば正倉特区ともいえる。ちなみに正倉には、おもに領民が税として納める「租」(稲)が収納されていた。

*わたしは、発掘された正倉跡の数がすべてではなく、北西側は崖崩れで失われていると主張しているが、誰一人賛同してくれない。いまに見ている!の心境である。

- ②・領民統治の大切な建物である「郡庁」がいまだに発見されていない。栗田さんは、影向寺と正倉跡が発掘された中間域を想定されているようであるが、わたしは子母口富士見台側に設営されていたものと推定している。これからの大きな課題である。

- ③・郡衙の遺構として未発見の施設もあるが、影向寺と郡衙の中核である正倉域が確認できたわけであるから、これを起点に郡衙域のランドデザインを描かなければならない。

◎古代の東海道と小高駅家の推定地はどこか? 「黒田の駅。郡家と同じき処なり」

◎収納された税物の搬送はどこから武蔵国府まで運んだのか? 茜の木簡 明津など
陸運と水運の問題

◎国家が配した田圃【口分田】はどこにあった? 現在にのこる久本村の条里など
生産基盤の問題

III・調査・研究のテーマは、まだまだ無限にひろがる

昭和47年、麻生区早野の横穴墓から馬群や人物を描いた線刻画が発見された。

この絵解きに夢中になった青年期。古代の文献と結びつけて、「牧」を想定した。
9世紀前半の『延喜式』によると、武蔵国は朝廷に貢ぐ駿馬の供出国であった。

東海道の小高駅家にも、官馬が常備されていた。→そのためには、「牧」が必要。

しかし、官馬も生き物、必ず死ぬ→そのときはどうする？

律令政府は8世紀中頃に施行された『養老律令』の「厩牧令」で決めていた。

*「斃れ馬牛」のうち、馬の脳ミソは、それを搾りとして「皮なめし」に使用した

『稲毛本庄検註目録』（承安元年・1171）にある「皮古造免五段」の歴史が見えてきたぞ

『川崎市史』などに書かれていた解釈

皮古（皮籠のこと）のこと。それを造る職人（手工業者）が「皮古造」と呼ばれていた。

その彼らに5段（約6000㎡）から挙がる年貢が免除されている。皮古造が庄官層とならんで免田をもっていることに注目するが、それ以上の考察はされていなかった。

それ以上の考察は、橋樹郡衙が野川・千年の一角に設営され、そこに東海道が通り、さらに小高駅家が設営され、官馬が常備されていたと考えれば、はじめて全体像が見えてくる。

つまり官馬（駅馬）が死ぬと、律令の決まりに従って脳ミソを搾りとして皮なめしに用い、籠（皮古）を造った。従事する彼らは「雑戸」と呼ばれ、税が免除されるなどの特典をうけた。

この皮なめしの技術は、北方のツングース系の民族から始まり、高麗・新羅・百済など朝鮮半島を経由してわが国に伝来した（『日本書紀』仁賢天皇六年紀）。

市域にも渡来系文化を伝える文物がある。

- ①『続日本紀』には、武蔵国橋樹郡の人・飛鳥部吉志五百国が隣接する久良岐郡で白い雉を捕まえて献上し、従八位下を賜った。この吉志は朝鮮半島からの渡来系氏族である。
- ②・宮前区野川・有馬流域には、火葬骨蔵器（骨壺）が多数発掘され、その一部は韓国・百済の葬儀様式と類似する。
- ③・有馬川流域に渡来系氏族が居住し、橋樹郡衙の経営にも関わっていた可能性は高い。すなわち、渡来人はヤマト政権側を支えるテクノクラート（高級技術官僚）であった。